

鴨長明の「幸福」(誌上シンポジウム 幸福について)

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2015-11-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 岡田, 安功 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00009217">https://doi.org/10.14945/00009217</a>

# 鴨長明の「幸福」

Was the Author of “Hojoki” Unhappy ?

岡田安功

Yasunri OKADA

静岡大学大学院情報学研究科・教授

okada@inf.shizuoka.ac.jp

## 1 はじめに

私は大学で「日本国憲法」（以下、憲法）という授業を担当している。憲法 13 条には「すべて国民は、個人として尊重される。生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利については、公共の福祉に反しない限り、立法その他の国政の上で、最大の尊重を必要とする。」と書かれている。この条文の「生命、自由及び幸福追求に対する国民の権利」という文言は幸福追求権を定めた規定だと理解されていて、憲法に明文で書かれていない自由権はこの条文に読み込んで解釈されている。一般に、憲法の教科書では幸福追求権の代表例としてとしてプライバシー権、自己決定権、環境権等が紹介されている。ところが、憲法の教科書に幸福の定義が書かれることはない。実は私も幸福追求権を教える時に幸福について語ったことがない。これらの事実は幸福というものの正体を象徴しているように思える。

本稿は幸福とは何かを社会情報の観点から追求する<sup>(1)</sup>。その際、抽象的に幸福を論じても意味がないので、多くの日本人が知っている鴨長明の生涯をたどり、彼の人生が幸福だったかどうかを考えることにしたい。鴨長明は世界遺産となった下鴨神社の最高位の神官の息子として生まれたにもかかわらず、不遇な人生を歩ん

だと思われていて、50 歳頃に出家して、晩年は小さな方丈の庵に住んでいた。

## 2 鴨長明の出自と幼少期

鴨長明は賀茂御祖神社（通称、下鴨神社）の最高位である正禰宜（惣禰宜ともいう）の次男として誕生した。父は氏人家（南大路家）の出身であるが禰宜家の鴨祐直の猶子になり、17 歳で下鴨神社の最高位である正禰宜になっている。下鴨神社の正禰宜は当時全国 23 カ国 70 箇所以上に所領をもっていた。この所領は江戸時代の大名クラスである<sup>(2)</sup>。また、下鴨神社の歴史は平安京よりも古く、歴代の天皇が行幸している。清少納言の『枕草子』には、「宮にはじめてまゐりたるころ」の段に、清少納言の仕えた中宮定子が「いかにしていかに知らましいつはりを空にただすの神なかりせば」<sup>(3)</sup>と詠んだことが書かれている。「ただすの神」とは下鴨神社に祀られている神である。下鴨神社は当時の御所の北東に位置し、鴨川沿いにある。当時の大内裏は烏丸通には接しておらず、東西を堀川通と千本通に囲まれ、南北を二条通と一条通に囲まれていた。当時の大内裏は現在の京都御苑よりも少し西にあり、現在の二条城の北にあった<sup>(4)</sup>。当時の御所から下鴨神社まで歩いて 50 分程度の距離である。下鴨神社と

皇室は精神的にも地理的にも近い関係にあった。鴨長明は父親の力が背景にあったと思われるが9歳<sup>(5)</sup>で従5位下に昇進を遂げる。父の長継は従4位下であった。平清盛は長明よりも32年前に12歳で従5位下になり、これは当時の貴族にとって驚きであった<sup>(6)</sup>。清盛と比べると長明の昇進は異例中の異例ということになる。

下鴨神社の正禰宜は官位が四位止まりなので、長明が殿上人になる可能性はなかったといえるが、長明は下級貴族として極めて恵まれた境遇で人生を歩み始めた。しかし、長明は20歳頃の父親の死を境に傍目には逆境の人生を歩み始める。長明の官位は生涯上がることはなかった。

### 3 鴨長明の栖の無常

自分の人生に対する鴨長明の評価は死の4年前に書かれた『方丈記』の有名な冒頭で暗示されている。

「ゆく河のながれは絶えずして、しかも、もとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは、かつ消え、かつむすびて、久しくとどまりたるためしなし。世の中にある人と栖と、またかくのごとし。」<sup>(7)</sup>

この「人」は長明自身を含んでいる。「栖」は長明が住んだ家を含んでいる。それでいながら、「人」も「栖」も普遍的な概念に昇華して使われている。長明はこの「河」を書きながら鴨川を連想していたのであろう。下鴨神社も下鴨神社の摂社で長明の出家に関わった河合神社<sup>(8)</sup>も鴨川の近くにある。長明が幼い頃から過ごした祖母の家を出て家族と離別して最初の家を構えたのも鴨川沿いである<sup>(9)</sup>。

『方丈記』の主たるテーマは「人と栖の無常」である。鴨長明にとって人と栖は密接に関連しているのであるが、長明その「人の無常」は後に見ることにして、ここでは、長明の「栖の無常」を見よう。長明が最初に住んだ父方の祖母の家は2778坪で、これは約95.75m四方の家に相当

する。長明は30歳過ぎにこの家との縁がなくなり、この家の10分の1程度の家を鴨川の近くに構える。長明は50歳頃に出家して大原にこもるが、約5年後に日野（京都市伏見区の法界寺の近く）へ移り、方丈の庵に住むことになる。方丈とは約3.03m四方、約5.5畳に相当する。方丈庵の「高さは七尺」、つまり2.1mくらいである。長明は方丈の庵を30歳過ぎに構えた家の「百分が一に及ばず」と書いている。長明は「住まひ」とか「住みか」という言葉で住居を表現しているが、上記の面積が敷地を含めた面積であれば不自然ではない。『方丈記』には数字がよく出てくるが、かなり正確だと指摘されている<sup>(10)</sup>。方丈の庵は長明の最後の栖なので、長明は幼い頃から30歳頃まで住んだ家と比べて1000分の1程度の家で晩年を過ごし『方丈記』を書いたことになる。確かに長明の栖は無常である。しかも、長明は自分の栖の無常に自分の人生を重ねて書いている。

### 4 『方丈記』までの鴨長明

『方丈記』の記述によると、『方丈記』は建暦2(1212)年3月29日に完成されたことになる。この時、長明は60歳（通説では58歳）で、4年後に長明は亡くなる。ここでは『方丈記』までの長明の人生を簡単に追っておきたい。

長明は当時の代表的な歌人であった。長明は地下歌人として23歳の時、二条天皇の中宮である高松院の北面菊合に列席している。長明は、29歳で私撰歌集『鴨長明集』を編纂し、34歳で伊勢に旅行して『伊勢記』という和歌を交えた紀行文を書いている<sup>(11)</sup>。36歳で勅撰和歌集である『千載和歌集』に入集し、49歳で和歌所寄人になり『新古今和歌集』の編纂に携わった。この和歌所は後鳥羽上皇が『新古今和歌集』を勅撰するために御所内に設けたもので、後鳥羽上皇は長明を大変気に入っていた。

また、長明は当時の代表的な琵琶奏者であった。長明は、一時期、院の北面で琵琶の演奏をしていた。後鳥羽上皇は和歌だけでなく琵琶の

演奏についても長明を注目しており、この関係は長明の出家後も続いている。

さて、和歌も管弦の道も当時の神官には必須の教養であった。長明はこれらに通じた名人であったが、神職に就く機会はなかった。長明が52歳の時、一度二度、後鳥羽上皇が長明を神職に就けようとした。まず、上皇は河合神社の禰宜職が空いたので長明をこれに就けようとした。河合神社の禰宜職は下鴨神社の禰宜に昇格するために必要な職で、長明の父もかつてこの職にあった。長明は上皇の厚意に涙が止まらなかった。これに対して、下鴨神社の禰宜である鴨一族の鴨祐兼が自分の子どもを推薦して強硬に反対した。河合神社を諦めた上皇は氏社を官社に昇格させて長明を禰宜にしようとしたが、長明は本来望んでいた職ではないとして辞退し、和歌所の寄人も辞して、失踪した後、出家してしまった。上皇は長明に和歌所に出仕するように求めたが、長明は応じなかった<sup>(12)</sup>。この時、長明は52歳である。

## 5 『方丈記』の頃の鴨長明

出家後の鴨長明は大原で隠遁生活をしていて、56歳で日野に移り方丈の庵に住むようになる。ここで書かれた『方丈記』は長明が人生を回想した後で現在の自分自身の生活を語っており、人と栖の無常に対する長明の心の風景を知る最大の手がかりである。

長明は世のはかなさを経験した事例として、『方丈記』の前半で大火、辻風、福原遷都、飢饉、大地震をとりあげている。これらは長明が25歳から33歳までの間に起きた事件で、27年から35年前の出来事であるが、平安末期の京における人と栖の無常を、長明は詳細な数字を紹介しながら冷静に回想している。長明の筆致は事件に対する驚きが時々顔を出す感傷がない。長明にとっての無常は悲しみや辛さの対象ではなく常ならずという事実すぎない。

『方丈記』の半ば過ぎで、長明は自分の出家について「もとより妻子なければ、捨てがたき

よすがもなし」と書いている。その少し前に、「父かたの祖母の家をつたへて、久しくかの所に住む。その後、縁欠けて」「一つの庵をむすぶ」と書かれている。これを素直に読めば長明は独身だったことになるが、29歳で編纂した『鴨長明集』には「そむくべきうき世にまどうふかな子を思ふ道は哀なりけり」<sup>(13)</sup>という和歌がある。この和歌が想像上のものでなければ、長明には妻子がいたことになる。私は長明に妻子がいたと確信している。「もとより妻子なければ」は事実ではなく心の真実であろう。これは出家に対する長明の意地のような決意表明である。『方丈記』の後半に十歳の小童との交流の話が出てくる。長明は十歳くらいの自分の子どもとも「縁欠けて」いたのではないだろうか。長明が孤独でなければこのような交流話は書かれなかったと思われるが、孤独だけが書かせたのではないと私は思う。しかも、長明は小童との交流を楽しそうに書いている。

『方丈記』の後半は長明の日常生活が描かれていて、生き生きとした自給自足の有様は京にいる貴族の生活に対する批判のようにも読める。このような記述から、『方丈記』を京の貴族に対する「恨みの書」「怨念の書」<sup>(14)</sup>と読んだり、貴族に対して貴方達は本当に幸福かと問いかける「復讐の書」<sup>(15)</sup>と読む研究者もいる。少なくとも、『方丈記』の長明は意識の上では自分自身の現状を肯定して生きている。

ただ、私にとって気になるのは、『方丈記』前半に描かれた京の災害は大部分が祖母の家に住んでいた時代の出来事である点と、『方丈記』後半に描かれた生活の拠点である方丈庵が「地を占めてつくらず」と書かれている点である。これは方丈の庵が柱を土中に埋め込んで作られているのではなく、土の上に礎石を置き、その上に柱を載せて庵が造られたことを意味する。これは神社の建築様式である。「所を思ひ定めざるがゆゑに」と理由が述べられてはいるが、下鴨神社への意識が働いていたのではないだろうか。そうだとすれば、『方丈記』を通底する

のは下鴨神社ということになる。『方丈記』の前半では下鴨神社の神官の息子として京における人と栖の無常を描き、後半では下鴨神社と縁が深かった30歳頃までの自分と現在の自分を対比して人と栖の無常を描いたことになる。しかし、そこに長明の悲惨な気持ちは描かれていない<sup>(16)</sup>。

実は、『方丈記』には長明の悲しさや辛さが書かれていない。例えば、長明は琵琶の名手であるだけでなく、琵琶を作るのも上手だったようだ。長明も気に入っていた自作の琵琶の名器を、長明が大原へ出家後に後鳥羽上皇が所望して、長明は泣く泣く手放している<sup>(17)</sup>。これは『方丈記』に書かれていない。また、『方丈記』が完成する直前ともいうべき、完成前年の10月に長明は鎌倉へ行って将軍である源実朝と和歌をめぐって何度か会談している<sup>(18)</sup>。実朝は長明と歌風の異なる藤原定家の指導を受けているので、長明と実朝の関係はそれだけで終わったようだ。これも長明の挫折として評価され、『方丈記』を執筆する動機になったと評価されている<sup>(19)</sup>が、『方丈記』には書かれていない。

もちろん、『方丈記』のテーマは無常であるが、長明にはこれを拒否する雰囲気がない。方丈庵で、長明は『方丈記』の前後に歌論である『無名抄』を書き、その後、説話集である『発心集』を亡くなる直前頃に書き上げている<sup>(20)</sup>。長明は書くだけでなく、琴や琵琶も楽しんでいたようだ。

方丈庵の長明は方丈庵から京の都だけでなく鎌倉幕府まで見ていた。長明は出家して隠遁生活をしていることになっているが、著作と管弦に励むことができる環境にいた。自給自足という貴族とは思えない生活スタイルを除けば、長明は並の貴族以上の生活をしていたことになる。

## 6 結びに代えて

### ～鴨長明は幸福だったか～

鴨長明のような人生を歩みたいかと問われた

ら、おそらく誰もが嫌だと答えるだろう。本稿には引用しなかったが、同時代の貴族は長明の生き方を冷ややかに見ていた<sup>(21)</sup>。長明が自分自身を幸福だと思っていたかどうか、私には分からない。長明が自分自身を不運だと思ったことがあると、私は確信をもって想像できるが、これはこの原稿の読者も同じであろう。もうひとつ私の想像を述べさせていただくと、日常の長明は自分を不幸だと思う暇がなかったと思う。長明は隠遁して自分自身の仕事はかどるようになったのではないだろうか。『方丈記』における長明の視線は常に時空を超えて遠くへ飛んでいる。これは長明が京の都から離れることによって、自分自身を中心とした人的ネットワークで世界を見ることが可能になったことを意味する。余計な人的ネットワークに接続される機会があまりなく、自分の望むネットワークのどこかにのみ繋がる人生は快適であろう。人が人を結ぶネットワークのどこかに繋がり、自分が満足できる量のコミュニケーションをしていたら、人の心は満たされる。人のネットワークとコミュニケーションの関数が人の心を満たしてしまえば、生活スタイルの他の変数である貴賤貧富はその人にとって無関係であろう。鴨長明は期せずしてそのようなネットワークにはまってしまったと思われる。人が幸福と呼ぶものはこの関数の値であり、人によって幸福の関数が異なる。幸福が関数の値である以上、幸福を一律かつ具体的に定義することは不可能だと思われる。

## 注

- (1) 鴨長明の時代に社会が存在したかといえ、社会学が対象とするような社会は明らかに存在しなかった。社会契約論の発想に見られるように、人々の合意によって自分自身が生きる世界の在り方を決定できない所に社会は存在しない。しかし、人は生きて行くために様々な情報を手に入れる。情報を手に入れる対象が他者で

ある場合、人と人のコミュニケーションを可能にするネットワークが本人の知らない範囲に広がって行く。このネットワークの広がりも広義の社会として捉えると、社会という概念が再定義され学問上の分析道具として有効性が深まると思われる。人類の歴史とともに存在する人が人に情報を伝達する行為（コミュニケーション）を媒介として成立する人と人のネットワーク空間（これは必然的に情報空間になる）のうち、近代に特有のネットワーク空間が既存の社会学が対象とする「社会」である。

なお、本稿の第一段落で幸福追求権に言及したが、これに関する文献の引用はあえて省略させていただく。関心のある方は図書館等で任意の憲法の教科書を手に取っていただければ、第一段落に書かれていることを確認できるはずである。

- (2) 小林一彦『鴨長明 方丈記』46-47 頁（NHK 出版、2013）。
- (3) 池田亀鑑校訂『枕草子』237 頁（岩波書店、1988）。
- (4) 高橋昌明『京都〈千年の都〉の歴史』3 頁、94 頁（岩波書店、2014）。浅見和彦編『カラー版 方丈記・伊勢記』9 頁（おうふう、2007）。
- (5) 通説では 7 歳だが、五味文彦『鴨長明伝』30-31 頁（山川出版社、2013）は長明の生年を通説よりも 2 年早いと考える。私は五味説に説得力を感じるので、以下の本文で長明の年齢を表記する時は通説よりも 2 歳年上に表示することになる。
- (6) 五味文彦『平清盛』10-12 頁（吉川弘文館、1999）。上杉一彦『平清盛：「武家の世」を切り開いた政治家』7-8 頁（山川出版社、2011）。武光誠『平清盛：天皇に翻弄された平氏一族』55 頁（平凡社、2011）。
- (7) 鴨長明著、浅見和彦校訂・訳『方丈記』17 頁（筑摩書房、2011）。本稿では『方丈記』のテキストとしてこの浅見和彦校訂版を用いる。
- (8) 河合神社の境内に長明が住んだ方丈の庵が復元されている。
- (9) 小林一彦『鴨長明 方丈記』15 頁（NHK 出版、2013）。
- (10) 鴨長明著、浅見和彦校訂・訳『方丈記』161 頁（筑摩書房、2011）。
- (11) 築瀬一雄編『古本 流布本 対照 方丈記』78-81 頁、158 頁（大修館書店、1994）。
- (12) 長明の出家の事情について、梁瀬一雄訳注『方丈記 鴨長明』178-182 頁（角川書店、2012）。
- (13) 築瀬一雄編『古本 流布本 対照 方丈記』77 頁（大修館書店、1994）。
- (14) 稲田利徳発言「《座談会》『方丈記』八〇〇年」文学 13 巻 2 号 4 頁（2012）。
- (15) 小林一彦『鴨長明 方丈記』98-101 頁（NHK 出版、2013）。
- (16) 無常観に内在するニヒリズムを克服しようとして『無常』を書いた唐木順三は『方丈記』の長明について「無常をむしろ享受し、無常を楽しんでゐるのではないかと思われる節がある」（唐木順三「無常」『唐木順三全集 第七巻』149 頁（筑摩書房、昭和 56 年））と評している。
- (17) 五味文彦『鴨長明伝』233-234 頁（山川出版社、2013）。
- (18) 三木紀人「『方丈記』への長い道のり」文学 13 巻 2 号 44 頁（2012）。
- (19) 小林一彦『鴨長明 方丈記』64-65 頁（NHK 出版、2013）。
- (20) 浅見和彦『方丈記』147 頁（笠間書房、2012）。
- (21) 鴨長明の生き方に対する評価を手短に要約するものとして、五味文彦『鴨長明伝』1-2 頁（山川出版社、2013）。